

「軽音楽クラブ部史(7)」

「さて、その後のBSSO—と言っても、それで

高津敏栄 (S48年卒/BSSO)

「楽友 第6号」で、中田健一さん(S38年卒)が「BSSO創世紀」として書いて下さったものがありますが、今回は、その10年後くらいにあたる時期の様子について、私がざっと振り返ってみたおぼろな記憶を辿ることになりました。

1. BSSO加入まで

私が入学し、入部したのは、1969年(昭和44年)のことです。

お決まりのコースで、中学時代のブラスバンドでクラリネットとテナー・サクスを経験したのが、音楽との関わり方の端緒です。しかし、その後進んだ高校でも楽器をやりたいかったものの、そこは、吹奏楽も他の器楽関係も何も無く、校内で唯一の楽器は音楽教室のピアノのみ。やむを得ず、合唱部に入り、混声と男声をやりました。今にして思えば、コーラスの経験が、相対音感や相対音階の訓練には随分役に立ったようです。

大学に入り、実は、私にはそもそも若干の江戸趣味もあったことから、かねがね純邦楽にも少々興味を持っていたもので、三曲研究会で尺八でもやろうかと一瞬迷ったこともあったのですが、やはりサクスを吹きたいという欲求の方が勝って、結局ジャズのことはほとんど知らぬまま、不思議な魅力を感じたビッグ・バンドに入ることにしたのです。その後、半年ほどの間、アルバイトでお金を貯め、テナー・サクスを買うつもりで楽器屋に行ったところ、フランス・セルマーには少し足りず、然らばと、その場でアルトに転向した次第です。かえすがえすも、軟弱な私でありました。

2. その時代の軽音楽クラブ

当時、軽音楽クラブには6つのスタイルのバンドがあったと思います。

ハワイアン(ワイキキ・シー・マーズ)、カントリー&ウエスタン(カントリー・ケー・ハース)、ブルー・グラス(ブルー・リッジ・マウンテン・ボーイズ)、デキシーランド・ジャズ(ジェミング・ホット・セブン)、ジャズ・コンボ(メランコリー・キャッツ)、そして我がBSSO(Big Sounds Society Orchestra)。毎年1回、文京公会堂で、クラブ全体の合同で定期演奏会を開いていました。ハワイアンバンドは、レターマンやセルジオ・オメンデスなど、ホップ・コーラスやボサノヴァ、ボサ・ロックのような曲も取り上げ始めていて、そろそろ古典的なハワイアン音楽から、別のニュアンスのヴォーカル・グループに変容しようとし始めた時期だったように、私には見えていました。

また、デキシーのバンドは、なかなかメンバーを集めにくくなっていて、私たちが4年生の時の定演では、そのバンドのレギュラーは、ベースの長島、ドラムスの藤田の両名だけで、メランコリー・キャッツから勝呂(ts)が移籍し、BSSOから荒井(p)と私がトラ(エキストラ)で

参加したりと、大変でした。

その折、私はアルト・サクスのしばらくぶりのクラリネットを吹かねばならぬはめになってしまい、あの名曲「Memories Of You」をクラリネットでヨレヨレにしてしまった苦い思い出もあります。

3. その頃のBSSOの選曲指向

その当時は、まだダンス・パーティー(ダンパ)と酔んでいた)なるものが大変盛んな頃で、会社や学生自身が主催するものが頻繁にあり、年末などになるとスケジュールが相当に立て込んだものでした。

このダンパの仕事は、なかなかいいギャラだったものでバンド運営のための資金源として貴重だっただけでなく、共演する相手のバンド、時にはプロの一流バンドを目の当りにすることができることや、また、ラテン・ナンバーを始め色々なジャンルやスタイルやテンポなど、種々の要求に応えるために、かなり幅広いレパートリーをいつでも用意しておかねばならぬことから、いい勉強の場にはなっていたのです。

しかし、それはそれとして、毎年年、意図して何曲かの新しいレパートリーを加え、その時々々のメイン曲としての取り組みも行っていたわけで、その頃のメイン曲の変遷を見てみると、そのまま、当時の欧米におけるビッグ・バンド状況の一端を垣間見ることができて、まことに興味深いものがあります。

また、それとともに、歴代のコンサート・マスターたちの趣味や指向も見え隠れしていて、これもまた一興ではあります。

4. 当時のビッグ・バンド地図

1970年頃というと、ビッグ・バンド・シーンは、スウィング時代を経て、再びCount BasieとDuke Ellingtonの2大バンドが主流となっていた頃です。そして、そのほかの伝統あるバンドのリーダーでは、Woody Hermanがエレクトリックなサウンドを取り入れて若手中心のバンドを率い、もっはらビートルズやドアーズなどポップスのヒット曲を、主に8ビートでやっていたし、スーパー・テクニシャン・プレイヤーが率いるバンドの両巨頭、Maynard FergusonとBuddy Richもやはりポップスや映画音楽などへの傾倒が強くなっていました。

彼らのバンドに近い位置でロック寄りのところに、元Ferguson BandのBill ChaseがリーダーのCHASE、CHICAGO、Randy

も今から30年ほど前、1970年頃のこと―

Breckerも在籍していたBS&Tなどがあって、これらのバンドのレパートリーを取り上げる学生バンドもありました。

一方、名曲でもあったC.Basieによってチャンスを与えられ、認められた、作編曲における僕物たちが、あるいは自らのバンドを持ち、あるいはスコアを他のバンドに提供するなど、大いに活躍した時期でもあります。Ernie Wilkins、Niel Helti、Quincy Jones、Frank Foster、Frank Wess、Thad Jones、Sammy Nestico、etc.

(閑話休題)

ここで思い出しましたが、私が好きな、ヴォーカル曲の2大“名イントロ”というのがありまして、一つは、Sarah Vaughanの名唱“Lullaby Of Birdland”。ラーララーラッシーソーソラーソファーファファファソソミーというあれ。実に、これはEanie Wilkinsのアレンジ。5つの音だけでこのフレーズは見事。

もう1曲は、下世話ですが、Helen Merrillの、お馴染み“You'd Be So Nice To Come Home To”です。タララララ、ラーツシトーツシラミラードミッララドミソソソソソソソソソ、これは、若き日のQuincy Jones。一拍ブレイクの後、You'd Be So Nice…と自然に歌が出てきてしまう、カラオケでもハツナリという、あっぱれなイントロです。

さて、時代性もあったからなのでしょうが、彼らの世代から出てきたムーヴメントの顕著な一例が、リハーサル・バンドの活況です。それらの中のいくつかは、ライブやレコーディングだけに止まらず、恒久的なバンドとしての活動へと発展したのも少なくありません。それは、上記の面々のほかにも、Oliver Nelson、Gerald Wilson、Duke Pearson、Kenny Clarke & Francie Boland、Michel Legrandなど、枚挙に暇がありません。

5. 再び選曲ばなし

我々の頃の学生ビッグ・バンドは、このような混沌としたシーンの中で、各バンドが多様な伝統やテイストによって、それぞれに指向が散乱し、同じく混沌としていたのです。この時期のBSSOが年どしに取り組んだ、Basie Band以外のメイン曲を辿っても、似たような様相が見えてきます。

私の1年生の頃からの4年間で、一端を例にとると、このような選曲が特徴的です。

1969年 コンマス：谷口(旧姓:藤木)文夫さん

- ・Moment Of Truth / Gerald Wilson
- ・Latino / Gerald Wilson

1970年 コンマス：松尾謙一さん

- ・The Groove Merchant / Thad - Mel
- ・Quietude / Thad - Mel
- ・Get Out Of Town / Clarke - Boland
- ・When Your Lover Has Gone / Clarke - Boland
- ・On Green Dolphin Street / Maynard Ferguson

1971年 コンマス：鯉和田保男さん

- ・Groovin' Hard / Buddy Rich
- ・Keep The Customer Satisfied / Buddy Rich
- ・Us / Thad - Mel
- ・Miss Fine / Oliver Nelson

1972年 コンマス：高津

- ・Minor League / Duke Pearson
- ・Tinseltail / Maynard Ferguson
- ・Don't Get Sassy / Thad - Mel
- ・Tow Away Zone / Thad - Mel



写真1

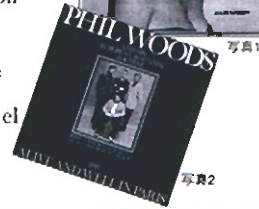


写真2

6. 更に、選曲ばなし

このように、いわゆるリハーサル・バンドのレパートリーがいかにも多かったことが、よく分かるでしょう。このような時代だったのです。

また、私たちが4年生の時、BSSOのF年は6名いたのですが、石川安雄(ts)と私だけがホーン・セクションで、あとの4人はリズム・セクションでした。荒井和男(p)、能勢博(g)、駒形隆(b)、西川康男(ds)。そんなこともあってか、私も含めて皆が比較的コンボ指向も強く、多分にリハーサル・バンドを好んだという傾向はあったでしょう。

Fergusonの“Tinseltail”という曲は、コンボっぽい部分とダイナミックなtuttiの部分がいまぐ構築された佳曲で、うまく出来れば十分に醍醐味のある曲なのですが、このようなものに限って難曲(技術的に)なわけで、この曲をやろうと私が言い始めた時、Bill Evans Trio風を期待したい頼みのリズム・セクションや、ハイトーンにリードされた豪快なsoliのあるドラムベットの陣から、少なからず反對と躊躇があったものです。